

(二) 國を擧げて神武天皇に還れ

「日本人は日本を忘れてはならぬ」、これほど當り前の事はあるまい。ところが、其れが爾うでないから不思議だ。うっかり忘れたといふのなら、研究の不行届といふことにもなるが、ワザく忘れようとして居るから訝しい、否、知らないのを自慢にして居るのである。曾て某志士が當世花形の某博士と國體の事て議論をした。その時にその博士がいふのに、それは日本の歴史にのみあることで、西洋ではない事だと言った、貴下は日本の歴史を學んだことがないかと責めたら、全く知らないと言った、而して彼れは寧ろその知らざることを誇りとして居るのであつた。

モロー一つヒドイになると、日本の事といふと何でもケチをつけたがり、西洋の事といふと、むやみに讚めたがる、妙な病もあつたものだ。こんなのが例の洗濯石鹼に砂糖をつけて食う連中であらう。てうと外國の事といふと、何でも夷狄呼ばりをして、自尊排他で押通す頑迷舊思想家と相對して舊頑迷と新頑迷、好一對の良い取組みである。然し流行といふものは恐ろしいもので、かういふ病

的思想が時を得顔に跋扈して、總じて國民、別して青年を誤るのは、眞に國の禍といふべきである。

元來ならば、西洋のことを能く知れば知るほど、日本の價打の勝れて居ることを思ひ當らなければならぬ。世界のどこを尋ねても、建國垂統の久しきこと日本の如きはない。それは何の原因から来たと考へて見るが可い、その國民性の特質、忠君愛國の特質、温雅醇良の性質、風流文藻の趣味性、武俠義勇の氣格、士道氣節の風習等、どう考へても他と異つて居るのに心づかない筈はない。只異つて居るばかりでも既に問題となるわけだ。それが勝れて居るのだから、これに不審を起しそうなものではないか。然るに此人々が、自分の國を悪く言ひたがるまでに外國崇拜に傾いたといふのは、源は全く學問思考の順序を誤つたものである。日本人で居ながら日本を知らないといふことは人間で居て人間を知らないよりもツと甚しい矛盾である。これは教育方針及び政治の缺陷から來たものではあるが、學者としては全く學問に不忠實なところから來たものと謂つて可い。

そこで予は、今この一大缺陷を、少しでも早く補充したいところから、圖星といふ目安をかゝげ

て國民に臨まうとおもふ。それは何か、外でもない

「國をあげて神武天皇に還へれ」

といふ一大標語である。日本の神武天皇だ、神武天皇の日本だ、日蓮聖人を通じて釋迦の眞を知れといふ如く、神武天皇を通じて天照太神も日本建國の主義も、日本の仕事も、世界の將來も、悉く知り得るのである。別して今の時代に於て、まごつきのない一番手取早い指針がこれである。

神武天皇は、一代を通じて不言實行的に、世界の將來が期待する所の人類目安の絶對平和を闡明されて、その光輝燦然として、吾等の頭上に輝き、世界の人文にその光を放射して居る。「三綱」の宣示と、「八大主義」の建國要諦である、これは議論で涅ねあげたのではない、事實で賄されたのである。神武天皇一代の言行は、直に日本そのものである。故に神武天皇を能く領會は、それで日本の主義も、日本國民の覺悟も、この國の使命も、世界將來の運命も、一返に埒のあく様に曉るのである。これをウカ／＼して居ては、國家も人生も決して要領を得ない。簡

單でありながら、而かも一番大事な急所である。教育も政治も、これを振出しにしなければ、一切落第だ。過去の日本は、之をウカ／＼して居た、故に落第だ。今の日本も相變らず、之を忘れて居る、ヤハリ落第だ。

祖先／＼と騒いで居ながら、日光や多武ノ峯は立派に造られて居て、然かも明治維新少し前まで、神武天皇の御陵が知れずに居たのは、何といふ非國體的失態であらう。論より證據國民的自覺を喪つて居た大々的落第ではないか。然し渺たる鎌足家康にさへあれほどの崇敬を捧げるほどの國民だから、それよりモット根元的の神武天皇を忘れる筈がない。然るにこの大矛盾は何から來た？、知らなかつたからである、ウツカリして居たからである、敢て用だと考へたからなのではない、全く氣がつかなくなつたからである、あゝ此の「氣のつかない國民」は長い間、このまゝで、平氣で、ボンヤリして、御經を讀んだり、和歌を詠じたり、戦をしたり、戀をしたりして居たのだ。八島壇ノ浦も、關ヶ原も、富士の捲狩も、醍醐の花見も、うツかり行つてしまつたのだ、全く氣のつかなくなつたのだ、氣がついたら、一刻片時も捨て、置けない筈である。聚樂第よりも日光よりも湊

川の碑よりも、最先に騒ぎ出さなければならぬ。秀吉でも家康でも、爾う物の解らない人ではない、況して賢明源光圀の如き、イの一番に朝廷へ奏請しそなたことである。かうまで揃ひも揃つて本を忘れたことは、いかにも合點がゆかぬ。恐らく仔細があらう、恭く神武天皇紀を案ずるに、建國の大猷は、究極世界の解決に在る趣は、日向よりの東征、饒速日の先業を趁ひたまへる、神人一貫の主張、八紘一字の規模、本末歸一の瑞語等より推しはかるに、世界公通の時機にあらざれば、日本國體の神髓は顯れない、又叨りに顯はすの要がない、火事あつてのポンプ、重病あつての良藥、時を違へず桃櫻、空に驚時鳥、遭ふべきに遭ひ、出づべきに出るが因縁感應の妙機といふもの、されば世界が交通を廣くし、而かもそれが行詰つて來た時、はじめてその解決者たる日本國體の登場すべき時であるから、自然天然の必要に迫り出されて、こゝに日本に一英主現はれ(神武天皇の再誕とも仰ぐべき)世界運命通塞の瀬戸際に立て、先づこの寶の國を開き「廣く智識を世界に求め」と解決の下地を採集し「萬機公論に決すべし」と解決の豫備提唱をほめかし、尋で「帝國憲法」(實は世界憲法の原案)を發表し、勅教(教育勅語)を宣

示して、解決の原據を公示して、みづから日本國體の體現者として世界にその全面影を露出たまへる明治天皇に至つて、奠廟以來千有餘年の新例を開いて、伊勢大廟に數度の行幸あり、畝傍の大陵は儼然として復古され、橿原神宮を創めて、建國即眞の大性を再現あらせられたのは、世界通一の機運に乗じて、神武天皇を具體現なされたものと考へる、即ち時である。既に「時」は來た「國」は開かれた。日清日露の兩役で、世界廻轉の「機」は熟した。世界の思想は、あとからくと解決の鍵を催促して「序」をうながして居る。國體宣明の「教」は、この時を以て、明かにされねばならぬ、五綱の能判、歴々として現在前して來た。誰が説き出さなくとも、時國機運の大勢すてに此に至つたからは、これ天の聲である。たい天の聲なるが故に、ウカクして居ては、人の耳に入りがたい邊もある。そこで之を人間の聲に移して宣傳する必要があるところから、恰も日露戦争で、日本國威の世界的に發揚した明治三十六年十一月、折柄大阪に於て開催中であつた本化宗學研究大會の學衆二百餘人を引率して、大和國畝傍の大陵に詣て、同所に於て一場の大講演を開き、此時正式に日本國體の三綱(養正と積慶と重暉)

が、神武天皇の勅諭より出て、大公至正の王道として、道義的世界統一の大猷なることを發表した。(その時の講演は「世界統一の天業」と題して、既に久しく世に公刊されて居る)これは予の發明でも創唱でもない、日本歴史の明記する所を如實に闡明したまでである。古來日本の歴史を講述したり研究した人は、いくらもあるが、この肝心な急所を押へて、強く國民の心胸に響きを與へなかつたのは、大に不審に思つたが、とうと神武天皇の御墓が、ツイ近年までも判らずに居たことの不思議と一對の不思議で、これ所謂時節であらう。即ち顯はれずして可なる時には顯はれず、顯はれねばならぬ時に到て顯はれたもので、全く日本國民乃至世間一同が、モ一此大道に聚らねばならぬ必然の運命に迫られて、自然と顯はれて來たものに相違ない。事實は教・機・時・國・序の感應歴然として居るが、之を人間の聲として世に宣傳するには、若干の理義言説に藉らなければならぬ。顧れば日本建國の歴史は儼然として、萬古の光を放つて居る。これを有のまゝに説弘めるのは、苟くも書を読んだものゝ義務である。依て予不敏をかへりみず、始めてこゝに建國の三綱を開題して、國體の内容がかく光輝あるものだといふことを大聲疾呼した。その後三保の松原に

最勝閣を創建し、これに「國體擁護之處」と扁して、こゝで數回に亘つて「日本國體學」の講習を開き、猶種々の書冊にこの旨を叙して、宣傳唱導日もこれ足らざるありまで、一門同志の徒と共に、常に身を捧げて血叫して居る次第である。

國體の三綱は、神武天皇のお語であるが、こゝを如法に解釋して、考案の要領を指示したのは拙者でめつて、國民として國に盡す當然の振舞から提唱したのである。東郷元帥ではないが、「皇國の興廢此一舉に在り」ともいふべき最大緊要事として、國民の心胸にひよかせやうとである。扱て此深解正解を得たことは、元より予の智力でも才力でもない、これは偏へに日蓮聖人の國體開顯に目覺めて、如法にその指南を奉じて得た正見である。聖人の三大秘法は、日本國體を個人的に開顯し、國家的に開顯し、世界的に開顯して、日本と法華經と世界と人間との總始末をつけるべく教へられた。教・機・時・國・序の五綱教判は、この三大秘法が日本國體を世界的に活躍させて、教法と國家と人生との一切を明瞭に合點させる理義決擇の指針として授けられたものである。國民の天職を自覺して、日本人らしき日本人となるのは、いふ迄もなく國民的覺醒だが、

國民の覺醒には、二つの條件が相具すべきことを覺悟しなければならぬ、それは

- 一 先づ自らの國を知つて、みづからの使命を自覺する……國民的覺醒
- 二 世界的解決の運命が日本に在ることを知つて、世界に成り代ての覺醒……世界的覺醒

この二大覺悟が具つて、はじめて日本國を知つた日本人となるのである。

この覺醒は、先づ神武天皇に還ることによつて口があくのである。完全に神武天皇に還り得ることによつて、日本皇室の眞に尊いわけがわかる。それは先づ國民に

取つての尊い事と、それから今一つは、世界に取つての尊い事と、この二つである。

このわけがよく解つて、はじめて「尊王思想」が本仕立になる、この根本から出發しての尊王で

なければ、三世を貫き神人を貫いた眞の尊王ではない。

尊王とか勤王とかいふ事を、租稅的義務と考へて居る様な淺露脆弱な考へて居ては、實に危険だ、甚だ危険だ、今にして大に根本的に目を覺さなければ、日本の出來たのが何にもならなくなつてしまふ。

支那の動搖、露西亞の激變、獨塊の覆滅、列國の勞働爭議、世界思想の變調、軍備縮小を我れに強ひて、自らは軍備を擴張する彼等の虫の好い横暴ぶり。況や飛行術の進歩に、心膽を寒らしむる彼等の大野心、法廷で革命歌を唱へ、學校で教師を袋叩きにする、毎日毎夜の人殺し、殘忍殺伐の風潮。内には民心の荒亂、外には猶太人の隱謀等。濁亂險惡の空氣、内外に浸潤瀾漫した今日の世相。これをしも安閑茫然として居るならば、全く骨もなく血の氣もないのである。

願くば吾輩良なる同胞よ、乃祖の血を廻念して、大悟一番脈々相傳の天真に復活して、猛然として國民本來の天職に就かうではないか。今回北白川宮成久王殿下の御兇變は、みづから平民主義實行の犠牲とならせられたものとして、いよく皇室の親民的御態度を崇仰する次第であるが、故殿下をして、この取り返しつかぬ凶事に畢らせ申した、この大なる手ぬかりの陰には、尊王思想の周匝徹底を缺いた國民用意の空隙があつたことに心附かねばならぬ。

皇室に於かせられては、平民主義いよく貴く美しい。然し國民に於ては、これを國家的に護

惜し奉らねばならぬ。現代の惡風潮として、何の分別もなくヤタラに平民主義といふことを立派な思想と心得て居るが、平民主義の用ゐどころが違つて居る。國民から帝室に對してこれを擬し奉るべきでは斷々乎として無い。皇室は國家の中心なり代表なり、その國家は道の結晶體なりである。然らば吾皇、室及國家は、一切世間の何ものよりも尊貴なものである。皇族は皇室典範上、すでに皇位の候補者中に數へられた重大責任者である。それを、國民としてウツカリして居るといふ法があるか。天災時禍はいかなる方でも追るべからざる事もあるから、單に故殿下の御災厄を以て、直ちに政府や議會に直接の責任を問うのではないが、只平民主義の一點張で、何等深重の省察を加へないで、平氣で居る滔々阿世の俗論に對して、一服の清涼劑を投ずる必要があると確信するから、前きに總理大臣以下各大臣にも警告を與へ、つゞいて此に奉弔講演として予の所信を披瀝したのである。

假りに故殿下の場合でも、若し國民警備の實が充實して居たならば、その公式たると微行たるに拘らず、天位候補者中の一人を、全然無警護に露出することなく、殿下の自働車に前警後衛各一輛の供奉車があつたとしたらはいかん。全然危害を脱し得ないとしても、尠くとも其御重傷は輕傷に、御隕命は御怪我ぐらゐですんだらうとおもふ。凡そ大事なものを保護するには、無用をしても保護する筈だ、況して國民として皇室を警備するは、單に宮様方に對する敬意のみではない、國家的に重大な意義から愛惜保護を致さなければならぬわけである。

それでも脱れ得ない場合は論の外だが、トニカク「人事を盡して天命を待つ」の筆法から言へば、明かに國民的用意の缺陷が、こゝに至つたといふことは争はれない。況や平民的くと熱にうかされて國家の重大損害を顧みないのは迷愚の至りである。殿下の美しい平民主義を、醜い平民主義で換算して、この大損耗を惹起し及びそれを讚美して居るとは、何といふ情けない意地らしい輕薄さであらう。

皇族は扱置き、國務大臣でも、國家の重責を負ふ職務から打算すれば、相當の警護を附するは國家自衛上當然の振舞である。然るにいやに平民がツて、俗論の甘心を得たさに、その自らの職位の重きことを忘却するといふのは、つまり一種の無責任である。大臣になれば屹度殺されるとい

ふわけもあるまいが、世の中には無思慮輕躁の輩、又は狂者等もある習ひだから、その萬一に備へるため、大丈夫といふだけの護衛を附するが當り前である。西洋の例がどうあらうと、そんな事には聊かも頓着する必要はない。故總理大臣原敬氏はどうした。この人は平民主義を自ら標榜して、精神もそこに在った様だ、それは自分の隨意だが、總理大臣の職は原敬氏のものではない、上陛下の重望を負ひ、下國民の重責に任ずる、いはゞ國の柱ではないか。それが萬一の事があつては、國に對してすまないと考へなければならぬ、然るに淺墓にも平民主義なる俗論に黨して、一人の護衛も附せずに、兇兒の覘ふにまかせて、大切の身を露出して、あの危禍にかゝつたのは、いかんとも残念なことである。總理大臣といふ重職を別として、單に原敬氏一個人の上から言つても、政友會の人たちは、定めし政治家的の大人物と信じて居たことであらう。苟くも大政黨の首領と仰がれるほどの人は、國家に取つても大政治家大人物として推重しなければならぬ。それを思慮も經驗も定まらない一青年に倒されたといふことは、國家の損害でないといひ得ようか。大人物を粗末にするといふことが平民主義の眞意義ならば、八百善の料理を猫の食器へ盛つても其れを喰べるか。著

いのに笠も帽子も冠らず、寒風に衣類も着ずに歩くか。凡そ平民主義の美點は、他に城府を設けず、倨傲放肆に構へず、よく衆と和して、共同性を尊重する所に在る。大事な職分や、大切な身材を粗末にすることではない。原敬氏の遭難に就ても、世の多くの俗論は、平民主義の犠牲者だと言つて之を讚美した。あまりの馬鹿らしさに呆れてものが言はれない。平民主義の權化といふべき良宰相であつたら、猶の事、國家はこの賢良の人を大事にすべく、五十人でも百人でも、警官なり兵士なり、前後左右を警衛するが可い。それでは費用が大變だといふなら、租税を増しても苦しくない、萬一の事があつてから騒いだのでは間に合はない。國家の重器を粗末にすることを平民主義と履き違へて、こんな取り返しつかない國家の損害を醸す段になると、所謂平民主義は一種の亡國論であると謂はねばならぬ。

貴族主義とか平民主義とかいふことは、元々一種の軽い人格態度に關した品騰であつて、國家の大節に望めて、何等價值のある話ではない。尊い方が高ぶらずに能く氣を下して人に交るぐらの話で、帝室が人民に對する親愛を表示する場合を平民主義と言ふのは、一種の假用定義で

あつて、嚴密にいふ義語ではない。官僚や貴族などの特權階級の態度を兇ふ反動から、平民主義の用語に相場がついたまで、場合知らずにむやみに用ふべきものではない。

世論の尻馬に乗つて、國民側から皇族方をも此埒内に扱うなどは、以ての外の輕躁である。假りに平民主義を圓滿の眞理だとしたところで、大切なものを大切に扱うのに何の不思議がある。「皇室に對する國民的警護」の件に就ては、後に一案を創唱して、吾が同胞に謀らうとおもふことがある。

畢竟日本といふ國が、どんな國で、この國の皇室は、國家及び世界に取つて、どういふ地位因縁を有せらるゝもので、國民の本領とはどんなものであるかといふことから、根本的に一大考察を加えてかゝらなければ、「尊王」といひ、「護國」といひ、「崇祖」といひ、「愛民」といふことも、骨までとつかずにしまふから、それがいつまでも皮相で扱はれて終ることになる。是れ國運の發達を害し、世界文化の前路を壅塞する由々しき大事であるから、自ら揣らず、こゝに若干言を費して、「尊王正義」と題し、現代の諸問題中、一番大切で根本的である治國處世の要諦を講述して、故殿下

が御身を以て世を啓發あらせられた高貴なる犠牲に應答し奉り、故殿下の威靈を通じて國民に深き覺醒を與へたいと希望する次第である。

附 記

本論とは、直接理義の聯關はないが、吾々の有體の心情を告白して、其筋の人々並びに赤心護國の同胞に相談したい一事がある。

それは外でもない「國民警護團」を創設する件である。

軍隊も警察も行届いて居るのに、それは餘計なことだといふかも知れないが、吾人は十分に軍隊も警察も信賴して居る。それを不足だからといふのではない、唯至誠護國の眞情已みかたきものがあつて、かういふ考を起したのである。

國民警護團創設ノ議

(一)

説明モ條件モナク、赤心誠忠ノ表現トシテ、國民警護團ヲ作り、有志ノ民衆ニヨリテ、官司以外ニ於テ、皇威御警衛ノ任ニ當ル有志ヲ團結スル事

(二)

此有志團ハ、國體觀念ノ充實セル、純忠至誠ノ人々ヲ以テ組織スル事

(三)

任務トシテハ、兩陛下ヲ始メ奉リ各皇族方ニ對シ、御通路等ヲ警衛シ又ハ警官ノ補助ニ盡ス

(四)

漸次増大、組織ノ完成ニツレ、其筋ノ了允ヲ得テ、皇居行在所又ハ宮殿ノ特殊警備ニ服シ、大小御行列ノ或ル部面ニ參加奉仕スル事

(五)

費用ハ一切篤志ノ義金ニヨル事

(六)

團資充實ノ上ハ、陸、海、空、三面ニ充遍シ、其筋ノ監督下ニ義勇軍的行動ヲ取ル事

(七)

直接警護ニ奉仕スルモノハ、思想、氣節、學力、性格、身體、技能ノ一切ヲ詮試シタル上奉仕ノ資格ヲ定ムル事

(八)

奉仕者ニハ一定ノ思想的及技術的訓練ヲ加ヘ國土ヲ以テ之ヲ遇スル事

(九)

警備術ハ専門ノ一科トシテ、科學的研究ヲ加ヘ世界無比ノ完全ナル警備技能ヲ案出スル事

(十)

國家一朝有事ノ際ハ、其筋ノ召命ニ應ジ相當ノ公役ニ參加スル事

以上は大體案であつて、全く具體的のものではないが、精神の在る所は略ぼわかるであらうとおもふ。軍隊も警察も、官制的に國家の公務として成立して居るもので、勿論最善を盡くして居るに相違ないから、民設の警護といふことは、蛇足の感がありはせぬかといふものもあらう。然るに之を要とする所以は何故かといふと、軍隊でも警察でも、官吏として立ち、國庫又は地方費から之を維持して居るので、その唯一の性命は、官制といふ一點に歸する。それも勿論必要ではあるが、思想で一貫したものは言へない。既に軍人の中から、非國民的のものや、賣國奴が出る様なこともあつたり、警官で不良の行爲をしたりする實例が有る通り、元々思想で一結したものでないから、官紀の弛みとか、不良の誘惑とかで動くものがないとも言へない。よしその憂は斷じて無いものとしても、官紀官制の劃一は、とても思想的信仰的結合の如く堅固とは言はれない。皇室に對する警護奉仕は、純然たる信仰状態に（迷信でない）堅く、且つ聰明に安心立命して居らねばならぬ。依て予は國家の御用奉仕以外に、一ツの根の深い堅固な精神團體で護衛奉仕する團體を造る必要があるとおもふ。むかしの楠氏や名和氏なども、官仕の以外の有志團で、あれだけ鮮明

な勤王行爲をしたのである。マ一其れの今一層純粹な上乘なものを造らうといふのである。

天下の義人、及び淨く富めるものは總立ちに起て、皇恩報謝の爲め、名聞的でなく、眞から底から護國の赤心を發揮して、一師團や一艦隊又は有力な航空部隊ぐらゐのものを造つて可い。

此議を眞面目に考へようといふ人は、予の提案を大成すべく良策を案じ出して下さい。

永田氏の「平易なる皇室論」にも義勇警察の念といふことを説いて

「我々國民は、總て義勇の警察官となり無制限の巡查となりたる心得を以て我皇族の御身邊を護衛し奉る事である、換言すれば國民警察 心得である」

と言つて居るのは、氏が久しく警察界に在ての實觀から出た至誠の言議として、予は大に此所論に同意するのみならず、之を煮てかためた奉仕團體として世に實現したいと思ふのである。

事は甚だ重大であるから、いよく實地に移す場合は、勿論慎重の方法を練らなければならぬが予の懷抱しつゝある衷情の表白として之を附記して、大方の參考に供へる。

この實施案に於ける詳細は、予亦別に考案もあるが、今は大體の創唱だけにして置く。

大正十二年七月二十六日講錄整記の時

智學 田中巴之助

敬白

吾同胞よ、この尊王正義を一讀して、その時より、
 深く吾建國の由來を憶念して、日本國民の大い
 なる使命を自覺して下さい、是れ講者および吾
 同志の寢ても寤ても忘れない願望であります。

田中智學先生の述べられたる
 國民的至要の二大研究案内

國民的至要の二大研究

日本國民は、何事をも一番大切の研究とすべきか、是れ國民頭上の懸案として捨置くべからざる問題である。人はやゝともすると、すぐに金銭といひたがる、金銭も大切でないことはない、けれども金銭の人間でなくして、人間の金銭である、人間に直接のもの、又はその根本たるべきものは、人間の要する一番大切な案件である、換言すれば人間は人間を研究するのが、何よりも最先の必要である。人間を研究するに於て、一番適切な根本的な研究は何であるかといふと、人間の依りどころは世界であるから、世界を研究する必要がある、それを研究するには

國民的至要の二大研究案内

先づその中心首腦を研究してかゝらねばならぬ。即ち機關部を解剖して全體の收まりかたを知るのである。「世界の機關部」とは、日本國體である、日本の國土といふよりは、日本を精神的に研究するのである、それが「日本國體」である、而してこの「日本國體」を歴史や地理や法律や政治やの上で研究するよりも、今一層深く根本的に、所謂精神的に研究するのが、この國體の深さと廣さとを完全に發見指導せられた所の國聖日蓮上人の研究である。

即ち國體の研究と、その解決者たる日蓮主義の研究と、この二つの研究が、世界として又人間として殊更國民として、最も大切な研究である。然るに今の日本國は、この一番に大切にすべき大研究

國民的至要の二大研究案内

を等閑にして他人扱にして、愚にもつかぬ迂遠な不
必要なことのみ腐心して居る、顛倒の甚しいもの
である。今此倒惑を救ふために、左にこの二大研究
の段取を示して置く。

(一) 國體思想に關する研究案内

「日本國體」といふことは、由々しき一科の大學問で
ある、世の人が「國體」といふことを淺く解して「國
から」といふ位に考へ、「民主的國體」とか「君主
國體」とかいふ程度のもので済ませたのは、甚だ遺憾千
萬の次第である、さりとて又一方國學者流のいふ如
き「御國體」なるものも、外形のけやくしき割合に、
内容甚だ貧弱にして、全然鎖國的偏狹思想に過
ぎないから、齊しく以て世界の公道公論とするに足
らぬ、「日本國體」といふものは斷じてそんなものでは
ない。
一國の歴史談たることを超越して、正しく世界的大事

實としての「日本國體」である、それを學べといふ、
それを行へといふ、それを護れといふのである、それ
が世界人類の根本的任務にして、亦最後の大事業で
あるといふのだ、諸道の聖人賢人が爲せる、諸の善
論名教は、皆これに到達せんとする道中の案内記で
ある、即ち日本が「日本國體」を有するにあらすして
世界がこの光榮ある「日本國體」を有して居るのであ
る。

悲しい哉、慨かましい哉、世界の人も、これに心づかず、
日本の人もウカウカして、此世界的大事業を没却し
却てろくでもないなき宗教道德文藝等の鶴學問に心
醉して自家の至寶を忘れて甘んじて乞食のまねをして
居る、之を残念といはずして將た何とか謂ん、何故
吾日本國民は先づ此最大事實に氣づかぬであらう。
予この事を慨すること深く、何とかして國體思想の復
活擴充を計らんと、筆に舌に文藝に建築に、凡そ
あらゆる機會ごとに一寸のすきもなく、常にこの叫び

を爲して已まない明治二十七年三月の上奏を始めと
して、近くは明治四十三年最勝閣を建築し題して

「國體擁護之處」といひ、尋で明治四十四年八月三日
より同二十三日に至るまで、予が創建に係る「日本國
體學」を講じ、更らに「神武天皇の建國」を草した「日
本國體の研究」を著述出版して國民的反省を促
がし、往ては全世界の思想界に問はうと考へて居る、さ
しづめ心あらん人々に、日本國體の研究をすゝめる
に就き婆心の致す所を、左に聊か案内を試みる。

- 第一 予の啓發によりて日本國體研究の心起ら
ば、次には
- 第二 「國民的反省」と「世界統一の天業」「天壤
無窮」とを讀み、更に
- 第三 「勸教玄義」を精讀して國體の精髓を得意せ
る上
- 第四 「興國の大詔」「尊王正議」「日本の建國」に互り
て深く國體の内容を概味し

國民的至要の二大研究案内

第五 國體解決の基本たる「日蓮聖人の教義」
を精讀し

第六 「日本國體の研究」「眞宗教と眞國家」を讀み
て原理的研究を加へ

第七 「日本國體學綱要」「大喪法語」「壽命」
「國體の權化」「あさひの森」「世界中心論」「叫
喚録」等を味讀すべし。

尙進んで深く理義の醇要を味はんとならば、國體の
爲に大光明を與へたる、正義唱導の恩人國聖
日蓮大士の主張を研究すべきである、由來佛法を以
て天竺の法など思ひ謬つた僻論者がある、一面には國
聖を誤り傳へて一宗派の祖と爲したる失意者があり、
内外より狭み僻めて、遂に國家をして此恩人に遠ざ
からしめたのは、此上もなき吾國の損害である。今や
時機到來してこの妄を警破することを得、國體の光
輝が宇内に照耀するに至つた。是れ即ち國民性的理
想の偉人たる吾が國聖日蓮大士の點睛による所、

國民的至要の二大研究案内

國民は一齊にこの國聖の膝下に聚り來るべきである。

(一) 日蓮主義研究案内

近時世間一般に、日蓮上人を研究しようといふ氣分が發生して來た様である。是は正しく日本國民が、何ものかの深い強い「力」にあらがれて來た證據であつて、誠に頼もしい次第であると思ふ。由來、日蓮聖人ほど、世の中から誤解されて居た偉人はあるまい、それといふのは一つは世人があまりに無頓着であつたのと、又一面には上人の化導がいかにも強硬で、他宗を假借せずに責め破つた爲め、感情的に嫌うといふ者から、深くも上人の眞相を究めもせず、一概に毛嫌ひするといふ工合であつたのと、今一つは日蓮上人の門下が上人を狭いものに扱つて居た爲に、この方面からも弘く世に紹介せられずに過ぎたのと、更に一つの大きな理由とするのは、上人の教導が普通佛敎者の多へが經驗した其れに比していかにも其轍を異にした行

四

方と、又その宣傳した教義が、至極大規模なる法華經の教理であるところへ、それを一層深刻に根本的に建設せられた爲め、尋常の佛學者の思ひも奇らざる深妙の旨があつて、お伊それと解りかねたる事である。即ち以上の種々なる理由

- 一 世人が此種の問題に重きを置かない風習による事
 - 二 上人の折伏強化に對する世人の嫌厭憎嫉が因となりたる事
 - 三 從來日蓮宗團の解釋があまりに狭く内的鎖國的な事
 - 四 上人の立教宗旨が尋常を抜いたる大規模最深遠なりし事
- これ等が障りとなつて、日本國に取つて何よりも大切な「國民性的偉人」にして「國體解決の恩人」たる日蓮上人を知らずに過ぎしたのである、是れば明かに國民の失敗である。

凡そ國民の性情を淘汰して、その固有した特色を發揮しようといふのには、尤も國性を完全に表示した人格に範を取らねばならぬ、而して其人格中に、たゞ一國の特徵ばかりでなく、あらゆる「世界的大思想」を集中消化したものでなくてはならぬ、この點に於て、神武天皇、聖德太子等の國性的大人格の上に、更に世界的大思想を消化攝容して、理義靡然たり事業條然たる大建設を爲したる日蓮上人が、吾等國民の國性發揮に模範たるべき標準としての理想的偉人であることを斷言し得るのである。

日本の國體と、法華經の大思想とは、俱に世界古今を通じての二大特色である、それを一人の上に表現した偉人は、明かに世界唯一の偉人である。日蓮上人は即ち此會流點に成功した大人格である。今の日本國民に取りて、何事よりも大切な思考といふのは、この大偉人の研究である、勿論鐵仰的研究である、されど若しコイツ不審と念ふものがあるならば解剖的研究

國民的至要の二大研究案内

五

- 一 予の啓發によりて研究の心を起したらば、次には
- 第二「妙宗手引草」を讀んで、さつと日蓮主義のあら筋を窺ひ
- 第三「宗綱提要」を見て日蓮上人の宗旨の綱要のみこみ

國民的至要の二大研究案内

- 第四 「日本國の宗旨」と「世界統一の天業」と「天壤無窮」を見て國體の解決を知り
- 第五 次に「日蓮聖人の教義」を反覆通讀して教義の梗概を曉り
- 第六 その後日蓮上人の「遺文全集」を通讀して直に聖音に接し(参考書としては「本化聖典解題提要」及「本化聖典大辭林」がある)
- 第七 次に「本化釋折論」を讀みて折伏大化の教要を知り
- 第八 參考として「國教七論」、「宗門之維新」眞宗教と眞國家」其他を一讀し、後に
- 第九 妙宗式目の正條に入り「同講義録」(改題「日蓮主義教學大觀」)を精讀し
- 第十 最後に「護法正義」妙行正軌」日刊新聞「天業民報」等によりて願行に資成するを一通りの順序として置く、尤も此前後に於て

宗信行要訣」▲「旭の森」▲「聖訓の實際的告白」▲「日蓮主義研究叢書各篇」▲「本化宗學概論」▲「國體の權化」▲「壽命」▲「聖祖の洪化」▲「國民的反省」▲「日蓮聖人の三大誓願」▲「本佛の三德」▲「師子王教談」▲「師子王瑣言」▲「毒鼓論」▲「日蓮主義法難集」▲「妙宗合本」▲「日蓮主義合本」▲「國柱新聞合本」▲「毒鼓合本」

養を欲する方々は、毎年一之江申孝園大講堂に開かれる「日蓮主義講習會」に參列聽講すれば事が早い、講習會は毎年夏八月を期して田中智學先生指導の下に開かれる、詳細は東京市外一ノ江國柱會本部事務所へ照會せられるがよろしい。

大正十三年十月十五日初版
昭和十五年九月十五日第九版

尊王正義
定價金壹圓

不許
複製

著者 田中巴之助

發行者 株式會社 天業民報社

代表 宇田川清三郎

印刷者 同 織田良正

印刷所 同 天業民報社印刷部

發行所 (東京上野鶯谷) 株式會社 天業民報社
振替口座東京五三九九三番
電話根岸〇〇九二番

田中智學先生國體名著

<p>明治大帝論</p>	<p>國體の 明治天皇</p>	<p>明治天皇の哲學</p>	<p>日本とはいかなる國ぞ</p>
<p>菊版 四十頁 送價 ●三〇</p>	<p>袖珍形 二一八頁 送價 ●五〇 ●〇六</p>	<p>四六版 四五三頁 送價並 ●一八〇 ●一四</p>	<p>四六版 三〇六頁 送價 ●八〇 ●〇六</p>
<p>明治大帝の誕應は國體の應時發揚にして、大帝御一代の洪業不績は、咸く皇祖皇宗の道統徳系の全現であり其勅教大訓は總て國體皇道の結晶であり國家の興隆、民心の作興、皆之に集中すべき事を主張せられたる寶書也。</p>	<p>明治天皇の偉大なる聖徳は中外の等しく鑽仰して措かざる所なり而も世人未だその聖徳の因て來る所を深刻に明解せず、本書は大帝が神武天皇の再現日本國體の事現なることを論明し現代國民に國體的自覺を促せる講演録也</p>	<p>凡そ日本國民として明治天皇の偉大さ有難さを感ぜないものは一人もない筈であるが深く大帝の御精神を理解し奉る事が未熟で、著者先生は之が國民的精神の作興統一の爲め進んで哲學的に御製を鑽仰講述せられしもの即ち本書である、之れ實に我が日本國民の寶典なれば有志は是非とも一本を具ふべきなり</p>	<p>此書は國民の新讀本たるべく極めて通俗平明に日本國體の要を知り國民の眞使命を了解せしめんが爲め述作せられしもので、先人未發の重大事件をも含められ、世間に渴仰せらるる國民必讀の良書なり。</p>

發賣元

東京・下谷・櫻木町一

天業民報社

電話根岸〇〇九二番
振替東京五三九九三番

終

